19世紀イギリスにおけるディストリクト・ヴィジティング
——女性文化としてのホスピタリティ、覚え書き——

松　浦　京　子

はじめに

19世紀イギリスの中流階級女性による慈善・博愛活動は最近、関心を集めている研究テーマの一つである。その主たる理由として、19世紀から20世紀の福祉政策史、福祉国家研究において「福祉の複合体」論が唱えられ、その広範な中間領域の重要要素としてヴォランタリ組織ならびにチャリティが改めてクローズアップされ、同時にその活動の担い手たる女性の存在に関心が向けられるようになったことを挙げることができる。すなわち、サッチャリズムへの反応としての福祉国家論議が活発化し、改めて19世紀の社会給付の体系が検証されるようになるなかで、多彩なかたちをとり、かつ量的にも無視しがたい女性の慈善・博愛活動に注目が集まったのである(1)。

一方、女性史ならびにジェンダー史の視点から見ても、慈善・博愛活動は、「領域の分離」観念の確立のもと、公領域での活動を厳しく抑制された19世紀の中流階級女性による例外的社会活動および運動として注目されるべきものである(2)。実際、慈善・博愛活動に何らかのかたちで関わった中流女性は非常に多い。それは、小説や評論にカリカチュア（例えば、女流作家としてオースティンと並べられることの多いギャスケル夫人の『北と南』、A・ジェイムソン夫人の講演集『仁愛の姉妹たち』、『パンチ』誌など）(3)が、19世紀半ば以降、慈善・博愛活動に熱意を傾ける女性を数多く扱うようになったという事実に反映されていると言える。また、実際にも当時の女性の日記や自叙伝には貧民家庭への訪問活動や慈善目的の組織活動への参加を綴るものが珍しくないのである(4)。彼女たちにとって、慈善・博愛活動はごくありふれた行為であったかのように思われ、女性の生活文化の一部を成してしたと感じられるのである。

とりわけ、19世紀の女性による慈善・博愛活動のなかで最も広範囲な活動であり中核的でもあったと考えられるのがディストリクト・ヴィジティング（貧民家庭を定期的に訪問し物質的援助とともに精神的ケアや生活習慣の改善を支援した活動）である。ヴィジティング活動に従事した女性のうち中流階級の女性はレディ・ヴィジターと呼ばれ未婚、既婚どちらも見られたが、あくまで無報酬で活動するヴォランティアであった。19世紀後半になると慈善組織のなかには労働者階級の女性を専従の訪問員として雇用するところが現われてきたが、こういった女性たちは

ミッショナリとかバイブル・ウーマンと呼ばれてレディ・ヴィジターの監督と指示を受けて働いていた[5]。したがってヴィジティング活動は基本的に中流階級女性のヴォランタリ活動であった。また、F・ナイティンゲールやベアトリス・ウェッブ（旧姓ポター）のような後に名を知られるようになる女性たちに見られたように、中流階級の未婚女性がヴィジティングに携わった場合、そのことが重要かつ決定的な経験として生涯に影響を与えるという結果を生むこともあった。

それゆえ、筆者は、イギリス女性文化としてのホスピタリティの在りようを検証するためには中流女性によるディストリクト・ヴィジティングに注目するべきと考える。すなわち、ヴィジティング活動が持つホスピタリティ理念に考察を加えるとともに、この活動が当時の女性にとって何を意味していたのかについても検討を試み、そうすることで、当時の女性観、女性文化とホスピタリティがどう関わっていたかの検証につなげられると考えるのである。本稿は、こうした想定のもとでの研究の第一歩である。

1　ホスピタリティとヴィジティング活動

まず、具体的な女性の活動、ヴィジティングの実態に話を進めるまえに、今一度、ホスピタリティのイギリス的意味合いを確認しておきたい。

「プロジェクト趣意」において言及したように、ホスピタリティ概念は古代から存在しており、内包する社会的意味は多彩である。とはいえ、19世紀イギリス社会においてホスピタリティが意識される背景に、ホスピタリティがキリスト教の徳目として存在しキリスト教徒的実践とみなされていたことが深く関わっているのは確実なところであろう。実際、19世紀は、前世紀に始まった国教会刷新運動の結果、聖書の福音に立ち返ろうとする福音主義思想が国教会の枠を越えて精神的倫理的支柱として大きな影響力をもっていた時代である。ハナ・モアに代表される思想家たちによって福音の真理にもとづく日常生活の規律化が強く求められ、その実践のもっとも相応しい場として家庭が、また実践者として「家庭の人」たる女性が期待されてもいた。そして、同時に女性たちは、「時間とお金はキリスト教徒の慈善という正しいチャンネルへとより賢明に向けられるべき」と呼びかけられ、家庭の監督者として規律化に努めるだけでなくキリスト者として社会の奉仕者となることをも奨励されていたのである[6]。このことは、現在「福祉の複合体」と呼ばれるほどの、公的救済を大きく凌駕する規模の私的救済が存在する社会給付体系が作り出されていたこと、かつ、その私的救済の中核たる慈善・博愛活動の担い手として女性が大きな役割を果たしたことの理由の一端と考えられる。そして同時に、当時の活動家たちを含めた人々がホスピタリティの価値を認識しその実践の模範を求めたのは聖書の福音であったということを示しているとも言えよう。

実際、新約聖書にはホスピタリティについて語る場面が少なくはないのである。たとえば、テベリヤ湖畔での5000人もの聴衆に対する食事の提供というよく知られた奇蹟も、イエスによ

るホスピタリティの実践と解釈される。また、マタイによる福音書25章は、イエスが『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初からあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなた方は、わたしが空腹のときに食べさせ、乾いていたとき飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに訪ねてきてくれたからである』と語り、正直者がそんなことを主に対してした覚えがないと答えたとき、『あなた方によく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわちわたしにしたのである』と返す逸話（マタイ書25の34—39）を伝えている。この一節は、キリスト教におけるホスピタリティの理念を示すものであると言えよう。ホスピタリティという言葉は使われていないが、その本質が語られている。すなわち見知らぬ者（他者）を歓待すること、持てる者が持たざる者へ何かを提供することという、キリスト教徒としてなすべき責務一つが例示されており、そして、そうした行為は、主に対する行為とみなされることも示されているのである。

また、ルカによる福音書14章は、『正餐や宴会の席を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持ちの隣人などは呼ばぬがよい。おそらく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を受けたことになるから。むしろ、宴会を催す場合には、貧者（貧乏人）、身体に障害者のある者、足の悪い者、視覚障害者を招くがいい。彼らは、返礼ができないから、あなたは幸いになるだろう。正しい人の復活の際にあなたは報われるだろう』（ルカ書14の12—14）とのイエスの言葉を伝えている。ホスピタリティの対象とするべき人々、すなわち、受け入れ歓待すべき人々、恩恵を与える人々を具体的に語っているのである。

以上のような聖書の描写を踏まえると、そこに示されるホスピタリティとは、病人、傷ついた者、寡婦や孤児、滞在者、異邦人、老齢者や獄にある者を対象とし、彼らが必要としているもの、すなわち具体的には飲食、衣類そして宿にはじまり、時に医療を、また、疲れを癒す言葉や精神的支えを提供する（差しのべる）ことである。それは提供者がホストとして他者すなわちゲストを物理的にも精神的にも受け入れることであるとも解釈され、例えば、聖書のいたるところに描かれる、イエスが自らのもとを訪れた人々とともに同じテーブルで食事をともにするという行為は、ホストとゲストとの交流、ある種のフェローシップの形成を象徴しているとも言える。さらには、受け入れるとは、実際に訪れる人を受け入れるというだけはなく、マタイによる福音書にあるように、病人や空腹の者のもとを訪ねること、時には獄中にある者を訪れることも含意されていた。出向くこともホスピタリティに含まれる行為であったと言える。

こうした描写のある聖書の一節は、教会をとおして、また、家族の日課となっていた聖書の朗読によって、19世紀の中流階級女性の目に耳に届いていた。そして、こうしたなかで中流階級女性たちは、大規模にそして組織的にディストリクト・ヴィジティングを展開していたのである。それは19世紀社会におけるホスピタリティの発露となっていたのであろうか。以下において、ディストリクト・ヴィジティングについて概観してみる。

2　他者との出会い、交流を求めた活動　―ヴィジティング―

ディストリクト・ヴィジティングは、その名のとおり救護の対象者のもとを訪問することである。多くの場合、ヴォランタリ組織によって組織されるもので、一定地域を街区ごとに分け、その街区担当のヴィジターを定め、貧民家庭を定期的に訪問し、必要とされているものを提供する活動である。

こうした組織的定期的訪問（ヴィジティング）の起源がいつかはかならずしも分明ではない。原初形態としてしばしば言及されるのが、メソディズム運動の一環としてのジョン・ウェズリの僚友たちによる病人宅への定期訪問活動であり、やはりメソディストのＪ・ガードナーが1785年に結成した『寄る辺無き人の友協会』によるロンドンおよびその周辺の困窮者を定期的に訪問する活動である。そして、19世紀になると、グラスゴー、セント・ジョンズ教区のＴ・チャーマーズによって、教区を25の地区に分け各地区には訪問とケア提供を担当する（ヴィジター役の）ディーコンを任命するという基本形式が創り出された。以後、国教会の教区教会でも牧師の指揮のもとに妻や娘、教会役員が貧民家庭を個別に訪問することが日常化していき、それを軸として定期訪問を主要な活動とする慈善組織（教会傘下の場合もあれば、独立したヴォランタリ組織であることもあった）が全国に広まり、とりわけ1830―40年代には加速度的に質量ともに増加したと考えられている(7)。一例を挙げれば、1870年代、年に20万件もの訪問を行なっていた記録の残るロンドン・シティ・ミッションは、1835年に設立されたヴィジティングを活動の中心に据えた福音主義系の慈善組織である(8)。

19世紀半ばまでの慈善組織（訪問協会）が提供するケアとは、具体的には無償もしくは有償の聖書、小冊子、毛布、食料、石炭ティケットなどの物品のであり、同時に、労りと慰めの言葉であった。そういったものをもたらすことで当座の状況の改善と、究極的には魂の救済というケアの実現をめざしていた。しかし、19世紀後半になってくると、より世俗的で多彩な活動目的を掲げる慈善組織が多くなっていった。訪問対象者をそれぞれ病人や障害者、妊婦、炭坑夫、水夫、囚人などに限定した組織や、一般労働者家庭を対象とした禁酒や家庭衛生の啓蒙といった生活一般の向上を目的に掲げた組織が登場し、提供されるケアの内容の多様化が進んだ。その結果、博愛活動史研究家のプロシャスカの見るところ、「訪問活動をする組織は無数と言ってよいほどに存在しロンドンではこれらの組織の目を逃れうる家庭はほとんど無かった」という状況に至ったのである(9)。

そして、このように活動が多様化、世俗化する過程で次第に女性のヴィジターが増えていった。初期には、牧師自身やディーコンなどの教会役員が自らが従事し、また訪問協会も男性主導で結成され実際的ヴィジティングの担い手も男性であった。しかし、19世紀半ばには女性ヴィジターが男性のそれを２倍から３倍上回るようになったと推定されている(10)。この女性ヴィジターの増加は、ヴィジティングという活動の特質そのものに女性を有用ならしめ、その

活躍を促す要因が含まれていたからであった。そして、その特質こそホスピタリティの理念に適うものであったと考えられる。

訪問活動は、救済対象者の住居、すなわち私的空間である家庭を訪問することによって成り立つものであった。この私的空間での活動という点で、女性の家庭外活動を抑制する当時の社会規範とも折り合いがついた。つまり、私的空間に立ち入る者はその本来の住人であるべきとされ、また同時に、訪問そのものも、女性の在るべき場たる「家内領域」での活動の延長とみなされ、女性活動が許容され奨励されたのである。そして同時に、家庭を訪れるという意味で、女性ヴィジターは、男性よりも家内のことにずっと詳しいという利点を持つので実情把握において優れているとも考えられた。女性ならではの特性が生かされるのがヴィジティングであったのである。それゆえに、女性によるヴィジティングは、社会的重要性が高く認められ、また、期待もされたと言える。19世紀の作家や社会評論家（観察者）の女性ヴィジターに関する言及の多さも、一面では、こうした認識と期待を反映したものであった[(11)]。

当然のことながら女性自身も、女性ヴィジターの有用性を明確に認識していた。女性ヴィジターが貧民に関して感知すること、それを情報としてもたらすことの重要性を、名高い女性活動家オクタヴィア・ヒルは、次のように主張している。1877年に発表した『ディストリクト・ヴィジティング』という小冊子のなかで、「政治家、博愛活動家、経済学者たちは、貧困問題を解決することに着手する、いや、頭をつかってそうしようとする。だが、彼らは牧師やヴィジターよりもうまくやれるのだろうか。かえって事態を悪化させることがしばしばあるのではないのか。なぜなら、牧師やヴィジターは少なくとも共感を持った貧民側の証人となるのであり、彼ら貧民の望みに実際的に対応しているのだから。一方、（上述したような）理論家たちは、彼らの理論がいかに優れたものであっても、とにかく（貧民）から離れすぎていて実際的な作用をほとんど及ぼせないのである。いまこそ、この二つの集団、勤勉ではあるがゆっくりと一般化を行なう思想家と、もう一つの愛情深い個人的実践家とが、コミュニケーションをとることが求められているのである。それぞれがもう一方が必要とする知識を持っているのである。」[(12)]と。効果的ケア提供（救済）の実現には女性によるヴィジティングの情報が欠かせないのだという自負が読み取れよう。

しかも女性のヴィジティングが担う役割は、個々のケア提供と情報の収集だけではなかったと思われる。19世紀半ば以降活発化した女性の訪問協会の活動においては、単なる物品、慰め労りの言葉の提供に留まらず、訪問先の労働者家庭の妻や母親との交流を重視するという新たな特徴が現われてくる。それは、こうした活動が、19世紀前半まで一般的であった困窮者の救済のためのケア提供とは趣を変え、労働者階級一般を対象として知識や情報ひいては観念の伝達を図り、啓蒙教化によって彼らの生活スタイル習慣そのものの改良を目指すものとなったからである。つまり、女性組織のヴィジティングの対象が普通の労働者家庭の妻であり母親であり、そして、生活習慣の改善に主眼を置くようになったことで、改善すべき点やそのやり方などを妻たちに具体的に伝え教えることが重要となり、ここに、そのために女性同士の言葉の交

換、語らいを通じての啓蒙教化、そしてそれを可能とする週に一度以上の定期訪問ならではの顔なじみの関係が生まれることが目指されるようになっていたのである。

こうした活動に力を注いだ組織としては、ランヤード夫人によって1857年に始められた「聖書と家庭に関する女性ミッション（通称ランヤード・ミッション）」、1859年結成の「婦人衛生協会」とその提携組織である「マンチェスター・ソルフォード保健協会」などがよく知られている。そして、オクタビア・ヒルによって組織された「モデル住宅提供運動」は、貧困者に良好な住環境のモデル住宅を低額な家賃で提供する代りに規則正しい家賃の支払いを促すもので、この家賃集金人がいわゆるヴィジターにあたる役割を果たしていた。すなわち、集金人の女性ヴィジターは、各戸を定期的に回り道徳面も含めた生活改良の相談相手となり、規則正しい家賃の支払いを実現させるというプロジェクトであったのである。また、1869年により効果的な救護活動を実施するために慈善組織を糾合して誕生した「慈善組織協会（通称COS）」は、画一的な物の供与を否定し個々の事例に相応しいケア提供をめざした組織であっただけに、個別事例の状況把握と状況に応じた救済策の効果的な実施のためにヴィジターの活動を重視したことで知られている(13)。

これら組織によるヴィジティングの具体的な検証は別稿(14)にゆずり、ここでは、婦人衛生協会の中央執行委員であったＳ・Ｒ・パワーズが1860年の全国社会科学振興協会の大会で行った、協会の活動報告の一節を紹介しておく。

「もっとも衛生知識を必要としている労働者階級こそが、従来からある方法では誰よりも最も教えるのがむずかしい人々である。……貧民層、とりわけ女性たちに対しては、衛生に関する小冊子をただ配るだけでは不十分である。小冊子がいかにすばらしく当を得た内容であっても、また、喜んで受け取られたとしても、それらは殆どの場合読まずにおかれるか、読まれたとしても正しく理解されることはなく、まず知識情報は伝わることはないのである。……（それゆえ）我々は、主として口頭で実践的に教えることに依拠すべきであり、ヴィジターの個人的影響力に期待すべきであると考える。貧民訪問の活動をするあらゆる組織にあっては、実践的な教化のために、そして、人々の精神状況にも肉体状況にもヴィジターの影響力が及ぶためにも、何らかの工夫がなされねばならないのである。」(15)

この婦人衛生協会は、保健衛生知識の普及を通しての労働者階級家庭の生活向上をめざしていたヴォランタリ組織であり、彼女たちが提供しようとしていたケアは衛生観念の形成とその結果として生活習慣の改善であった。それだけに当初から学校や講演による教育・啓蒙よりヴィジティングを重視しており、まさに啓蒙教化の基本は、ヴィジターと訪問対象となった家庭の女性との個人的な語らいであると認識していたのである。

以上のような背景と発展経過をたどった19世紀の女性によるヴィジティング活動は、究極において訪問対象家庭の人、すなわち妻や母との関係性の構築と、その結果としての効果的なケア提供を目的とするものであった。それは、また、女性同士の語らい（おしゃべり）を核に置くと言う意味でオーラル・コミュニケーションの世界に生きていた労働者階級女性の生活文化

に見事に適応した活動でもあったと言える[16]。そして、語らいに基づく関係性の構築という点において、ヴィジティングは単なるケア提供を超え、ホストとゲストとの交流というホスピタリティ理念を体現していたと考えられる。つまり、ヴィジティング活動は、女性であるがゆえの特性を生かしたホスピタリティの実践であったのである。

3　ヴィジターにとってのヴィジティング活動とは？

それでは、こうした活動に多くの中流階級女性が関わったのは、なぜであろうか。

すでに述べたように、福音主義の影響や家庭訪問という活動自体が女性の参加を肯定し奨励するものであったこと、また、工業化、都市化が急激に進むなかで生じている階級間の断絶や対立の緩衝材としての期待があったことなど、ヴィクトリア的社会状況が外的要因となって、女性ヴィジターの活躍を現出させたとは言えるだろう。しかし、当の女性たちは、貧民家庭を訪問し彼らの救済のために尽力したいと決意するとき、何を思っていたのだろうか。なにゆえにヴィジターになったのだろうか。ホスピタリティと女性文化との関わりを考えるためにも、彼女たちの動機に目をむけてみたい。

むろん、彼女たちの動機は多様であり、単純な説明ですませられるものではないだろう。純粋な宗教的情熱に突き動かされてという者はたしかに居た。ワイトマン夫人やE・フライやランヤード夫人など慈善・博愛活動家として名高い女性の多くは、その信仰心の厚さで知られている[17]。確固たる信仰心、宗教的覚醒、これらは19世紀イギリスの女性文化の一面であったと思われる。しかし、大半の女性に当てはまることとは言えない。むしろ、単調なアイドル・ウーマン（有閑婦人）の日常への刺激を求めて、もしくはファッションの一種として人もするから自分も、というような確たる動機を持たないままにヴィジティングに従事した者も多かったのではないだろうか。

たとえば、1891年にある教区牧師が匿名で出版した『我がディストリクト・ヴィジターたち』は、「世間知らずのお節介ぶり」や「浮ついたところ」や「浅はかな騙されやすさ」などを女性ヴィジターの特性として羅列し皮肉っている[18]。当時、牧師は、慈善・博愛分野での活動において女性ヴィジターと共に活動することが多くその成果においてある種の競い合いの関係にあり、それだけに彼らは女性の活動に対して批判的で攻撃的な言動を示していたと指摘されている。したがって、この記述はそれなりに割り引いて見なければならない描写ではある。しかし、このような指摘に女性ヴィジターのある種の真実が含まれていたことは否定できない。また、『パンチ』誌のような風刺雑誌に登場する女性ヴィジターは当然揶揄の対象であるのだが、それは例えば華美な服装でのスラム訪問といったような「勘違い」ぶりであった[19]。大した覚悟もなくヴィジティングに従事する女性たちが少なくなかったのも一面の真理であったのである。

こうした例にあてはまると思われるのがアデレード・パウントニーである。彼女は、24歳か

ら26歳（1864―65年）にかけての日々をつづった絵入り日記を残しているのだが、そこに記録された生活は、19歳で牧師であった父を失っているものの残された母と兄弟姉妹とともに大きな屋敷に住み数名のサーヴァントに傅かれるという典型的な富裕中流階級の女性のそれである。家事一般にはほとんどと言っていいほど関与せず、友人知人宅の相互訪問と教会通い、ちょっとした習いごとに明け暮れるレミントン・スパの日々を描くなかで、彼女は、日曜学校での授業（初出は1864年２月７日、以後毎日曜日）と訪問協会運営の衣類クラブの集金人としての活動（初出64年２月９日、以後毎火曜日、時折水曜日）を、ごくありふれた日常として言及している。また、彼女は、64年の末にトーケー近くの田舎に引っ越し（1864年12月１日)、そこでも慈善組織の会合に顔を出し（1864年12月13日）老人宅の訪問や本の「読み聞かせ」の活動を始める（1865年３月30、31日）ものの、翌週にはその約束を忘れる失態をおかしたことを淡々と書きつづっている[20]。この日記は、自らの心理を分析して記録するといったたぐいのものではないので、ごくあっさりした描写は当然のことであるのだが、こうした活動が特記事項ではないところに「特別な動機を持つわけではない」付和雷同型のヴィジターの姿が垣間見られるのである。アデレードのような姿は女性ヴィジターの一つのかたちであったと思われる。

しかし、その一方では、ヴィジティング活動に社会的な価値そして自身にとっての大きな意義を認めて、それに参加していった女性たちも少なくなかったと思われる。その例は、のちに夫のシドニーとともに社会問題の研究にあたり社会政策の形成にも関与することになったベアトリス・ウェッブ（旧姓ポター）の若き日の姿に見出すことが出来る。

成功した実業家家系出身で自身も新旧両大陸にまたがって投資を展開した企業家を父として典型的な富裕中流階級家庭に育った[21]ベアトリスは、1883年４月ころからCOSのヴィジター（正確にはレント・コレクター）となりイースト・エンドで訪問活動に従事するようになり、時折、活動に関しての感慨を日記に記している。彼女のCOS活動への眼差しは貧民救済の効果を認めつつも幾分シニカルなものであったようだが、一方では「この慈善（ケア提供）がうまく受け入れられうるか否かは、ケアの供与者（ヴィジターのこと）と受容者（訪問対象者）とが結ぶ関係が発達させる道徳の質によって決まる」とも述べていた[22]。これは、家庭訪問による関係性の構築に基づいてケア提供を効果的なものとする、という先述したヴィジティング活動の究極の目的、意義に、ベアトリスが共感していたことを示していると言えよう。

COS加入の動機については、「COSに参加したことから得られるはずの経験は、私の『人間研究』にうまく生かされることだろう」という心境からであったと記し、その半月後には「貧民の元へと出かけていくことは、非常に有益である。我々ヴィジターは、新奇で興味深い人生経験を貧民から学ぶことが出来るし、彼らの人生と置かれた環境の研究によって、我々は社会問題を解決する際の材料を得られるのだ。そして、貧民と触れあうことで、総じて我々ヴィジターの美質は磨かれ、人や状況に対して元来自分が持っていた理解がいかに誤ったものであったかを知って愕然としつつ、我々ヴィジターは思慮深い慈愛の精神を身につけていくのである」[23]とも書いていた。ベアトリスにとって、ヴィジティングは、社会的有用性を持ちかつ自

身にとっても意味あるものであり、また、その実践を通じて自身が成長するということを願っていたとも言えよう。そして、彼女は、「時間は飛んでいくように過ぎ去っていく。私はまだ何も成し遂げていない」(24)という焦燥感をあらわにした言葉を残しており、この焦燥感を癒す方法の一つがヴィジティング活動への参加であったことを示唆している。

生涯にわたって日記を書きつづり自伝も残したベアトリスの場合、彼女の若き日が強い自己否定をともなう「自我の分裂」に苦しむものであったこと、また、自我の安定的確立を求めて彷徨い、宗教や科学や文芸などに安らぎを求めたものの得られなかったこと、最終的に社会（労働者）への奉仕、天職と感じた社会調査への献身、そしていわゆる「社会主義」にたどり着いたことなどはよく知られている(25)。こうした精神的遍歴を経た女性であるからこそ、ヴィジティングが彼女にとって社会的有意性を獲得して肯定的自我を確立するための第一歩として意義深いものであったと言えるのかもしれない。しかし、こうした自己充足、自己確立の道をヴィジティングに求めることはベアトリスのみに当てはまることではなかったと思われる。例えば、ベアトリスをCOSのヴィジティングに誘ったのは姉のケイトであった。彼女は自らの意思ですでにCOSに参加し活動していたのである(26)。

慈善・博愛活動は、当時にあっては中流階級女性にとって社会的に期待される役割であり、また唯一大ぴらに参加してもよい公的な活動であった。現実的にもヴィジティングは広く社会を見る機会を与えてくれるものであった。いや、なにより、その活動は貧民へのケアの提供であり、「貧困」との戦いであり社会への奉仕であった。それだけに、ベアトリスのみならず女性ヴィジターたちが、「繁栄の中の貧困」という現実にある種の階級的罪意識にかられてか、もしくは社会への貢献の機会を求めてか、もしくは単に社会的期待に惹かれてであったかもしれないが、自己の価値を確認し自己を主張できる場として、ヴィジティング活動を捉えていたとしても別段不思議でもないのである。

中流階級女性がヴィジティングに従事するに際して、全ての女性がベアトリスのような明確な目的や自意識を持っていたとは言えないかもしれない。しかし、前述のアデレードのようなタイプの女性であっても、ヴィジティング活動に関わることによって知己を得て交友関係を豊かにしていたことは事実であった。日曜学校での生徒の変化を嬉しそうに日記に記載することもあったのである。また、宗教的な動機からヴィジティングに携わった者たちにあっても、活動それ自体が自己充足であり、自分の価値を確認し自己表現をすることにほかならなかった。やはり、究極的には、ヴィジティングなどの慈善・博愛活動に携わることは、中流階級女性にとって私的な「家庭」世界から一歩踏み出し公的な社会へのつながりを得ることであり、なにがしかの自己確認、自己実現の機会を得ることであったと考えられる。

4　むすびにかえて

以上のような中流階級女性にとっての意味をヴィジティング活動が有しているのだとすれば、

それは、当時の女性文化、女性像にとってはどのような意味を持ったのだろうか。

福音主義の思想家として影響力をもったハナ・モアは慈善・博愛活動を妻、母、娘としての「本分」の自然にして不可欠な部分であると捉え、女性がそれに従事することを奨励した[27]。「女性であること」すなわち「女性らしいこと」と当時見なされていたものが慈善・博愛活動に相応しいとみなされたのであり、換言すれば、慈善・博愛活動は女性文化を体現するものの一つであったのである。ヴィジティングが究極的にめざした、女性同士の語らいを通しての関係の構築と、その結果としての効果的ケア提供という戦略も、オーラル・コミュニケーションが伝達の中心であった労働者女性の文化に相応しいものであった。しかし、一方で、上述したように、慈善・博愛活動としてのヴィジティングに従事することは、女性の公的な場での自己表現であり自己確認の機会でもあったから、厳然と男女の領域を区分し男性に従うことを求めていた当時の社会規範に抵触する可能性も孕んでいたと考えられる。

現実的にも、女性の慈善・博愛活動への傾倒を非難する声は上がっていた。たとえば、1859年2月の『フレイザーズ・マガジン』に掲載された匿名記事「未来への懸念—女性らしくあることを止めようとしている女たち」は、以下のように述べ、慈善・博愛活動に熱中する女性に警告の言葉を発していた。

「舞踏会を覗いてみると、本来なら最優先事項であるはずの化粧を後回した見目良き娘たちをかなり見かける。どこかの（ヴォランタリ）組織の有力メンバーで、パンフレットに文章を書き公約も発表したりしている娘たちである。どうやら、人の多く集まる集会でも演説をし重要課題については熱弁をふるったりもしているようである。つまりは、彼女たちは“公的人物”といった存在で、もはやうら若き乙女ではなくなっている」と、そして、「私の息子たちは、このような女性に甘いささやきを掛けようなどとは絶対に思わないだろう、なぜなら、それはブローアム卿（著名な博愛活動家）やカニンガム氏の銅像に恋をするようなものだからだ」[28]

慈善・博愛活動に携わることで社会的に自己の価値を表明し自己実現を図ろうとしている若い女性に対して嘲笑の言葉をなげかけるものであり、彼女たちのそういう願望（これはベアトリスが求めていたことでもある）に対しての明確な懸念の表明となっている。

また、こうした懸念や警戒には、「福祉の複合体」という新たな専門職分野における主導的立場を女性が占めようとすることへの男性側の懸念という側面があったことも指摘されている[29]。すでに述べたように、同じフィールドで貧者の信頼を競い合うことになりかねない聖職者たちと女性ヴィジターとの間にはある種の緊張が存在していた。また、19世紀になって新たな博愛事業への発言者となった人びと、すなわち貧民層の生活状況を観察・分析・報告する立場にあったジャーナリスト、社会統計家、社会政策に関わる官僚や経済学者が、女性博愛活動家を揶揄したり、ヴィジターの無知を告発することはめずらしくなかったのである。たしかに女性側の経験不足や専門性のなさは否定しがたいところではある。それでもやはり、ここには、ヴィジティングを中心にして一層活発化していく女性活動への男性の警戒の念を読み取れる。

女性の慈善・博愛活動は、確かに奨励もされ期待もされていた。しかし、それはあくまでも一定限度内でのことであった。男女の領域を分ける当時の社会観念とのあからさまな抵触には、やはり厳しい警戒の目が向けられることになるのである。つまり、ヴィジティング活動に傾倒すること、そしてその活動がより自立的に展開されていくことは、「女性の分を超えること」、「女性らしさ」を失うことと見なされるわけである。

19世紀における女性ならではの特性を生かしたホスピタリティの実践であり、その意味でも「女性文化」の体現でもあったヴィジティング活動は、それだけに賞賛もされ期待もされたのであるが、一面においては、その時代が規定する「女性らしさ」の喪失、言い換えれば「女性文化」からの乖離につながる可能性を秘めていたのである。そして、それゆえに、この状況は「女性文化」や「女性観」の変容につながりうるものであったのではないだろうか。つまり、懸念や非難を受けつつも現実には、領域の分離観念に規定されていた女性の在りよう自体が少しずつ変りつつあったことを意味していると考えられるのである。

19世紀のイギリスにおいて中流女性によって活発に展開されたヴィジティング活動は、女性的特性を生かした近代ホスピタリティの一つの形態であったと考えられ、同時にそれは、女性文化の体現でもあり、また、それを変容させていくものであったのである。

注

(1) 代表的なものとして Finlayson, Geoffrey, *Citizen, State, and Social Welfare in Britain 1830-1990*, Oxford, 1994, pp.6-13; Kamerman, S., 'The New Mixed Economy of Welfare: Public and Private', *Social Work*, Jan.-Feb., 1983, pp.5-10; Brenton, Maria, *The Voluntary Sector in British Social Services*, London, 1985, pp.5, 15-23. 一方、国家福祉の拡充過程で女性が果たした役割に注目した研究もあり、推進勢力として評価したものとしては Bock, G. and Thane, Pat (eds.), *Maternity & Gender Politics, Women and the Rise of the European Welfare states 1880s-1950s*, London, 1991, chs. 4, 5; Lewis, J., 'Gender, the family and women's agency in the building of 'welfare states': the British Case', *Social History*, XIX, 1994, pp.37-55. 逆に女性の関与の限界を指摘する研究として Pedersen, Susan, *Family, Dependence, and the Origins of the Welfare State: Britain and France 1914-1945*, Cambridge, 1993がある。

(2) 女性の慈善活動を扱った研究は従来より存在し、網羅的に扱った代表的研究としては、Prochaska, F. K., *Women and Philanthropy in Nineteenth-century England*, Oxford, 1980. 小説のなかの言説をもとに女性の慈善活動がジェンダーや階級イデオロギーとの間に引き起こした緊張を分析したものとして Elliott, D. W., *The Angel out of the House: Philanthropy and Gender in Nineteenth-Century England*, Charlottesville, 2002. わが国でも、2006年に出た河村貞枝、今井けい編『イギリス近代女性史研究入門』青木書店の第5章が「慈善と社会福祉」に当てられていて、金澤周作「チャリティと女性」がある。同章所収の高田実「家族・中間団体国家―19世紀後半から20世紀前半までの福祉と女性」、出島有紀子「福祉を担う女性たち―オクタヴィア・ヒルと住居管理運動」は、注1の観点からのものである。

(3) Gaskell E., *North and South*, 1855 (邦訳は日本ギャスケル協会監修『ギャスケル全集4』大阪教育図書、2004年に『北と南』の題で所収); Mrs. Jameson, *Sisters of Charity, Catholic and Protestant. and The Communion of Labor*, Boston, 1587; The Punch.

(4) Ex., Brittain, V., *Testament of Youth, An Autobiographical Study of the Years 1900-1925*, London, 1933; (Webb, B.) MacKenzie, N. & J. (eds.), *The dairy of Beatrice Webb*, vol.1, 1873-92, London, 1982; Pountney, A., *The Diary of a Victorian Lady: Scenes from her Daily Life 1864-1865*, Ludlow, 1998.

(5) 労働者階級の訪問員に関しては、拙稿「一九世紀後半のイギリスにおける衛生訪問教育—衛生思想に見る「家庭管理のあるべき姿」—」『西洋史学』170号、1993年、18-35頁）ならびに Elspeth, *The Story of the Ranyard Mission 1857-1937*, London, 1937、参照。

(6) Elliott, *op. cit.*, ch.2, '"The Care of the Poor Is Her Profession" Hannah More and Naturalizing Women's Philanthropic Work', pp.54-80; Hall, Catherine, 'The Early Formation of Victorian Domestic Ideology', Burman, S. (ed.), *Fit Work for Women*, London, 1979, pp.20-27.

今井けい『イギリス女性運動史　フェミニズムと女性労働運動の結合』日本経済評論社、1992年、第一章「「独自派」フェミニズムと女性社会福祉運動」13-50頁、参照。

(7) Kidd, Alan, *State, Society and the Poor in Nineteenth-Century England*, Basingstoke, 1999, pp.80-82. 石田好治「トマス・チャーマーズによる救貧思想の実践　—グラスゴー、セント・ジョンズ教区における私的慈善の試み」『政策科学』11巻2号、2004年、73-4頁。

(8) Prochaska, *op. cit.*, p.105.

(9) *Ibid.*, pp.100-106, 231-235, Appendix I.

(10) *Ibid.*, p.109.

(11) たとえば、社会改良運動家として名高くガヴァネス問題の解決に尽力したことでも知られるF・D・モーリス師が賛同者とともに行った博愛活動に関する中流階級女性向けの講演は、家庭およびその延長領域での女性の役割を認め奨励する社会認識を反映したものであった。ただし、ヴォランタリ活動であり男性の活動家の補助者的役割である場合にはという限定がついていた（Rf., Elliott, *op. cit.*, ch.4, '"The Communion of Labor" and Lectures to Ladies', pp.111-134)。

(12) Hill, O., *District Visiting*, London, 1877, pp.4-5.

(13) ランヤードミッションと婦人衛生教会の活動に関しては、既出の拙稿「一九世紀後半のイギリスにおける衛生訪問教育」ならびに拙稿、「妻たちのオーラル・コミュニケーション世界前世紀転換期イギリスにおける労働者階級女性の情報伝達」川北稔・藤川　隆男編『空間のイギリス史』山川出版社、2005年、42-56頁、参照。ヒルのプロジェクトに関しては、既出の出島論文、ならびに Hill, O., 'Extract from the "Letter to My Fellow Workers: Work Among the Poor During 1881"', Robert Whelam (ed.), *Octavia Hill and the Social Housing Debate*, London, 1998、参照。また、COS に関しては、高野史郎『イギリス近代社会事業の形成過程』勁草書房、1985年が詳しいが、特にヴィジティングに着目したものとは言えない。

(14) 語らいを通じての啓蒙教化活動の詳細については、近刊予定の「ケア提供者としての女性　一九世紀イギリスのヴィジティングがめざしたもの」『もてなしと、いやしの社会史—近代イギリスにおけるホスピタリティー（仮題)』で検討を加えている。

(15) Powers, S. R., 'The Diffusion of Sanitary Knowledge', *Trans. of National Association for the Promotion of Social Science*（以下、NAPSS と略), 1860, p.713.

(16) 拙稿「妻たちのオーラル・コミュニケーション世界」42-56頁、参照。

(17) Prochaska, *op. cit.*, pp.116-130; Pitman, R. E., *Elizabeth Fry*, London, (1884) 2007; Pratt, *op. cit.*

(18) *My District Visitors*, (By a Parson), London, 1891 pp.16, 32, 77.

(19) 'In Slummibus', (*The Punch*, May 3, 1884), in Appelbaum, S. & Kelly, R. (eds.), *Great Drawings and Illustrations from Punch 1841-1901*, N. Y., 1981, p.36.

(20) Pountney, *op. cit.*, pp. vii-x, passim.. 当時の訪問協会は貯蓄習慣と計画性の観念を身につけさせるために衣類などの購入を目的とした積み立てクラブを運営するのが通例であり、彼女はこうしたクラブの集金人を務めていたのである（*Ibid.*, p.1)。

(21) Beatrice Webb, *My Apprenticeship*, London, 1926, pp.5-9.

(22) (Webb, B.) MacKenzie, N. & J., *op. cit.*, (18 May) p.85.

(23) *Ibid.*, (30 April),(18 May) pp.82, 85. 彼女は、担当した家庭において、子どもを里子に出し生活苦を緩和する救済策を提案じるのだが、その際の母親の嘆きへの深い憐れみと共感の念をつづると同時に

冷静な観察眼も発揮している（*Ibid.*, 20 May, p.86）。

(24) *Ibid.*, (30 April) p.82.

(25) *Ibid.*, pp.xi-xv, passim; Webb, *op. cit.*, passim. 名古忠行『ウェッブ夫妻の生涯と思想　イギリス社会民主主義の源流』法律文化社、2005年、第１章。

(26) 前掲書、35頁。

(27) Elliott, *op. cit.*, ch.2.

(28) Anon., 'A Fear for the Future, That Women Will Cease to be Womanly', *Fraser's Magazine*, 59, 1859, p.246-7.

(29) Elliott, *op. cit.*, ch.5.